
ネギま!?～死神の少女～

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！？～死神の少女～

【Nコード】

N5307M

【作者名】

ぱつつあん

【あらすじ】

崩玉の事件が解決してから数年の月日が経った。事件を解決に導いた二人が結婚して一人の娘が生まれた。娘はお父さんの死神の力とバカデカイ霊圧を受け継ぎ、お母さんからは見た目の美しさと優しさを受け継いだ。だがそんな娘は異世界にとばされてしまう。そこで出会う仲間と娘一黒崎魅香の物語である。※これはBLEACH Hの世界のオリキャラがネギま！？の世界に行く物語です。ちなみに作者は今ネギま！？の知識を収集中です。ある程度集まったら続きを書きたいと思います。

始まりの出来事（前書き）

これはBLEACHとネギま!？のクロスオーバーです。

ちなみにBLEACHの原作キャラは今のところ出ない予定です。

さらにネギま!？のアニメ（原作）にオリキャラが介入する物語です。

ではどうぞ!!

始まりの出来事

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ...

からくら町にて化け物のような雄叫びが響きわたっていた。

そんな声をとある少女の耳を捉えていた。

「来やがったか!!」

とある少女は寝ていたベッドを跳ね起き机を見た。

「つてない!?!どこ行った!?!」

とある少女は机の上にあるものをすべて床に投げ捨てた。

しかしお目当てのものが見つからなかったのか階段を急いで駆け下りた。

そしてリビングの扉を開け放った。

そこにはツンツン頭のオレンジ髪の男が新聞を読んでいた。

「お父さん、僕の擬魂丸は!?!」

とある少女が叫ぶとツンツン頭の男が振り返った。

「なんだ、なくしたのか?」

「そう言うことなんだけどお父さん知らない？」

するとそこにきれいな髪をした女性がとある少女に近づいてきた。

「どうしたの？魅香？」

「あっ、お母さん？」

魅香と呼ばれた少女が女性の方を向いた。

そこでツンツン頭の男が口を開いた。

「魅香が擬魂丸なくしたらしいんだ」

「大変どうしよう!？」

女性がなにやらあたふたとして慌て始めた。

「大丈夫だ織姫。おーいコン出番だ!おーい」

どうやら女性の名前は織姫と言うらしい。

そしてツンツン頭の男がコンと言う者と呼ぶがまったく返事がなかった。

「コンさん、出番よ」

織姫がそう呼びかけると二階からガタガタと動き始めた。

するとリビングに黄色いライオンのぬいぐるみが入ってきた。

「はぁ～い織姫さぁ～ん、ゴファ!？」

そう言っつて織姫の胸に抱きつこうとするコンをツンツン頭の男が足の裏で壁に押し付けた。

「デメエ：なんで俺が呼んでもこねえんだ？ あぁ？」

ツンツン頭の男はそう言いながらグリグリとコンを押しつけている。

そんなツンツン頭の男の足を払いのけコンが地面に立った。

そしてツンツン頭の男を指差しながら言った。

「おいこら一護、調子乗ってんじゃねえぞ!!」

どうやらツンツン頭の男は一護と言うようだった。

「うるせえごちゃごちゃ言っつてねえで出すもんだしやがれ!!」

一護はそう叫んでコンを驚掴みにした。

「おいこら一護何しやがゴフウ!？」

一護はコンの口の中に手を思いっきり突っ込んだ。

そしてコンの口の中をかき回した。

「おっ、あったあった」

一護はそうつぶやくとコンの口の中から緑色の粒を取り出した。

「これ使え魅香」

そう言っで一護は唾液でベチャベチャになった緑色の粒：擬魂丸を魅香に差し出してくる。

「お父さん、汚いそれ」

「文句を言うな。魅香がなくすから悪いんだ」

そう言っで一護は魅香に近づいてくる。

そして魅香の口の中に擬魂丸^{コン}を無理やり押し込んだ。

すると魅香の体から白い衣装に身を包んだ魅香が現れた。

「何回見ても珍しいな。死神の白の死博裳なんてな」

一護の言ったとおり今の魅香は白い死博裳に身を包んだ死神である。

そして背中には身の丈ほどの大刀が納められている。

「どうでもいいけどお父さん、後で覚悟しておいてね」

魅香は一護に素晴らしい残すと玄関を飛び出して雄叫びのする方に瞬間移動した。

これは瞬間移動したように見えるが実は高速移動した結果そう見えるようになっただけである。

ちなみに名前を瞬歩と言う。

そして雄叫びの主と思われる化け物がいる場所についた。

「見つけたわ、ホロウ」

ホロウとは死んだ人間の魂を食らって生きる悪しき魂の事である。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ」

ホロウは雄叫びをあげると魅香の方に突っ込んできた。

魅香は背中に納められている大刀を静かに抜いた。

包帯に巻かれた刀身が露わになった。

刀身は真っ白な純白のように真っ白で汚れをしないようだった。

そして形は柄も鏢もない包丁のような形をしていた。

「サクツと終わらせますか」

魅香はそうつぶやくと刀を振り上げた。

そして突っ込んできたホロウに向かって振り下ろした。

「雪牙天衝…」

純白の刀からは吹雪が吹き荒れたような風が吹きその中を鎌鼬のよ

うなものが駆け抜けた。

その鎌鼬はホロウの胴体を捕らえ真っ二つにした。

するとホロウが空気に溶けるようにして消えていった。

「今回も楽な仕事だったわ…」

魅香がそうつぶやきながら刀を背中に閉まった。

そのとき突如として空間に亀裂が発生した。

「何!?!」

魅香が驚いてその方向を見た。

その瞬間、魅香の体は亀裂の中に吸い込まれていき魅香の姿が消えてしまった。

つづく…

始まりの出来事（後書き）

次回は魅香の紹介です！！

オリキャラ紹介

【名前】

黒崎 魅香 くろさきみか

【家族構成】

父…黒崎一護

死神としてかなりの実力を持っている。始解、卅解、嘘化を巧みに操り戦う。

母…黒崎（井上）織姫

優しいが感覚が少しおかしい。

弟…黒崎聖

一護や魅香のように死神化は出来ないが霊能者である

居候…コン

人形の中に擬魂丸を入れただけ。

【能力】

始解…雪月 せつげつ

一護の斬月と全く同じ形をしている。ルキアの袖の白雪とおなじで純白である。

卅解…天鎖雪月 てんさせつげつ

一護の天鎖斬月と全く同じ形をしている。色は純白でなく一護の内なる嘘と同じ色をしている。

雪牙天衝…一護の月牙天衝の吹雪バージョン

【服装】

始解…純白の死博裳をまとっている。

卍解…一護と同じ服装で純白。

何故純白かは誰にも分かっていない。

【総合評価】

何故ここまで一護と類似しているかと言うとただ単に一護の娘であるから。

死神化できるようになったのは小六の時。

始解ができるようになったのは中二。

卍解ができるようになったのはつい最近のこと。

魅香は夜一に頼み一護と同じ方法で卍解を会得した。

さすがに嘘化は出来ないが実は…（ネタバレを含むのでNG）

【性格】

一人称…僕

キレたとき…俺

好奇心満々だが面倒なことには極力関わらないようにしている。

かなりの負けず嫌いで一回言ったことは絶対に曲げない。

卍解を会得したのも負けず嫌いが影響したからである。

恋バナにはかなり首をつっこんでいく。

自分の秘密は誰にも口外しないが誰かの秘密は教えてもらうまでしつこくついて回る。

頼まれてもほとんど断っていく。

かなりの努力家で納得のいかないことがあれば満足いくまで努力し続ける。

【容姿】

性別…女

身長…163cm

父譲りのオレンジ髪と母譲りのサラサラな手触りをしている。

腰まで伸ばした髪をサイドポニーにしている。

【戦闘力】

攻撃力、防御力、回避能力、移動速度、霊圧（魔法力）をE～Sで表します。

最高LEVELはS+です。

【黒崎魅香】

攻撃力 【A】

防御力 【C】

回避能力 【B】

移動速度 【A】

霊圧 【S】

【黒崎一護】

攻撃力 【S+】

防御力 【S+】

回避能力 【S+】

移動速度 【S+】

霊圧 【S+】

【グリームジョー】

攻撃力 【A+】

防御力 【A】

回避能力 【S】

移動速度 【A+】

霊圧 【S】

出会い（前書き）

変なところあると思いますがあまり知識がないので優しく指摘してください…

ではどうぞー！

出会い

「うわああああああああ……」

魅香は謎の穴に吸い込まれてあれこれ数分間は謎の空間の中を落ちていっていた。

謎の穴に吸い込まれて魅香は身動きがまったくとれなくなっている。

中は真っ暗で明かりはなかった。

「うわああああああああ……」

それで魅香はさっきから絶叫を上げ続けていた。

「何なのよあの穴はー！！全く、不幸だああああ……」

どこかのツンツン頭のフラグ立て王子の不幸野郎のような言葉を叫びながら魅香はまだまだ謎の空間を落ち続けている。

すると出口が見えてきたのか落ちていく先から光が近づいてきた。

「出口？って、ええええええええ！？」

ようやく謎の空間から脱出することが出来た魅香は再び絶叫してしまった。

何故なら今、魅香がいる場所はかなり高い場所から落ちているからだ。

白い死薄裳がバタバタと風を受けてなびいていた。

「うわあああああああああつ!?! ヤバイよ、さすがにこれはああああ!?!」

魅香は上空でスカイダイビングをしながら有らん限りの力で叫んでいる。

ちなみに死神の力を持っていれば空中に立つことも出来るが何故か魅香はそれを出来なかったのだ。

だから今の状況に焦っているのだ。

そんな中魅香は背中に携えられている包帯に包まれている刀を抜きはなった。

「とりあえず困ったときの卍解よ!!」

魅香は刀を前に突き出して霊圧を集中していった。

そして…

「卍・解!!」

霊圧を一気に爆発的に上昇させて卍解…

出来なかった…

「ってなんで出来ないのよおおおおおおお!!?!」

魅香は再びスカイダイビングをしながら絶叫してしまった。

どうやら正解も出来なくなってしまうたらしい。

「ヤバイよ、本気でヤバイよ!!!このままじゃ墜落して死ぬよ!!!僕はまだ死にたくないいい!!!」

魅香は空中で刀を振り回しながらだだをこねる子供のように暴れていた。

そんなことをしている間に地上との距離がかなり縮まってきていた。

「くっ、こうなったら雪牙天衝で勢いを弱めるしか…」

そうつぶやいて魅香が雪牙天衝を放つために刀を構えようとして魅香は驚愕した。

魅香が雪牙天衝を放とうとしている先には赤髪の子供とネズミ?みたいな動物が何かをしていたからだ。

「なんでこんな時に人がいんのよ!!!てか、避けてえええええ!!!」

魅香が有らん限りの声をあげて下にいる一人と一匹に叫んだ。

すると二人?は魅香の存在に気づきあたふたし始めた。

「早く避けてえええええ!!!」

魅香が再び二人?に向かって叫んだ。

すると赤髪の子供がこちらに杖を向けながら叫んだ。

「アモリスタ!!」

赤髪の子供がそう叫ぶと魅香の体が地面より数メートル上で急停止した。

「あ、あれ？助かったの？」

魅香はいまいち今の状況を把握し切れていないようで混乱していた。

そして魅香の視界に再び赤髪の子供の姿が目に入った。

何やらネズミ？とこそそそと話していた。

「何話してんの？」

魅香が二人？に話しかけるとビクツとしながらこちらを振り向いた。

「あ、あのく今の見ましたよね？」

何やら赤髪の子供が恐る恐ると言った感じで魅香に問いかけてくる。

そして魅香は魅香で違うことを考えていた。

（結構霊圧高いのね…）

そんなことを考えていると二人？の会話が魅香の耳に入ってきた。

「兄貴、こうなったら記憶を消すしかないでっせ!!」

なんとネズミ?のような生物が赤髪の子供の耳元で叫んでいた。

そして魅香はそんなネズミに興味を示した。

「すごい、話せるネズミだ!？」

魅香はそう叫んでネズミ?を思いつきつかんだ。

ネズミはじたばたしながら魅香に叫んでくる。

「俺はネズミじゃねえ!!オコジョだあ!!」

「オコジョ?それがアンタの名前ね!!」

魅香はオコジョを近づけながら問いかける。

すると赤髪の子供が杖をこちらに向けながら言ってきた。

「見られたからには記憶を消させてもらいます!!」

「記憶を消す?アンタ喧嘩売ってんの？」

魅香が刀に手をかけて殺気混じりで睨みながら言った。

すると赤髪の子供はひいっ!?と言ってなかりビビっていたようだ。

すると向こうの方から話し声が聞こえてきた。

「ヤバイ、逃げろ!!」

赤髪の子供は魅香の手をつかみ茂みの方に走っていった。

もちろん魅香の手も捕まれているため引きずられていった。

そしてしばらくして赤髪の子供が止まった。

だが魅香の機嫌はかなり悪くなっていた。

何故ならば魅香の死薄裳が木の枝などに引っかかりボロボロになっていたからだ。

「アンタ、これどうしてくれんの？」

魅香は死薄裳を指差しながら赤髪の子供に向かって言う。

しかし魅香はここであることに気づいた。

何故この赤髪の子供は死神である自分と普通に会話をする事が出来ているのかと。

死神の姿は霊圧が高いものや同じ死神でなければ見えないはずなのだ。

（そう言えばこのガキの霊圧も結構高いし見えてもおかしくないか）

魅香は深く考えることもせず結論を割り出した。

それよりも今は破れた死薄裳が問題だった。

「で、どうすんの？」

「えっと…」

子供に対して大人げないなと思いながらも魅香は睨みつける。

するとオコジョが魅香と赤髪の子供に向かっていった。

「兄貴、どうせもう見られたんだから魔法で姉さんの服も直したらどうだ？」

「えっ？でも…」

「大丈夫、今の時間帯なら誰もいないって言ったのは兄貴でしょ？」

オコジョの言葉で赤髪の子供はようやく決心したのか立ち上がった。

そして杖を魅香に向けてきた。

「何する気？」

「魔法でアナタの服を元に戻します」

魔法と言うおとぎ話に出てくるようなオカルトとしてしかとらえていない魅香はいまいちピンと来なかったが取りあえず任せることにした。

赤髪の子供が魅香に向けた杖からは魔法陣のようなものが展開された。

そして赤髪の子供が詠唱を始めた。

「時の精霊よ、いざ来たらん。我に宿りて時を超える。土はまばらへ、砂は墓標へ。テル・マ・アモリスタ!!」

赤髪の子供が詠唱を終えるとさっきまでボロボロだった魅香の死薄裳が元通りに戻った。

それを見た魅香は驚いていた。

「すごい、ホントに直った!! ねえ君なんて名前なの? 僕は黒崎魅香よ」

「えっと僕はネギ・スプリングフィールド。よろしくね魅香さん」

「葱?」

「姉さん、ボケは入りませんわ」

オコジョに指摘された魅香だったが別にボケたつもりは微塵もなかった。

すると魅香はいきなり刀をつかみ叫んだ。

「誰、隠れてないで出てきなさい!!」

魅香がそう叫ぶと近くからメガネをかけた白髪の男が出てきた。

「タカミチ!!」

「へっ？」

ネギが出てきた白髪の人に駆け寄っていった。

しかも何やら嬉しそうな顔で駆け寄っていている。

「久しぶりだね、ネギくん。ところでそっちの子は？」

タカミチと呼ばれた男は魅香を見ながらネギに問いかける。

「さっき上から降ってきた」

「振ってきた？まあいいや。ネギくんと君もついてきてくれ」

そういつてネギとタカミチは近くにある学校に歩いていった。

それに急いで魅香もついていき一緒に学校の中に入ってしまった。

中はとても広く豪華な造りになっていた。

「うはぁ、すごいな。僕の学校とは大違いね…」

魅香は学校の中を見ながらそうつぶやく。

ちなみにタカミチに教えてもらったことだがここは『麻帆良学園』
と言うらしい。

そしてネギとタカミチは職員室の前で立ち止まった。

「あなたも魔法使いなの？」

「ん？黒崎くんはネギくんが魔法使いってこと知ってるみたいだね？」

「まあさっき助けてもらいましたから…」

魅香は頬をポリポリと掻きながらタカミチの問いに答える。

そしてネギとタカミチは職員室の中に入ろうとした。

魅香もそれについて行こうとしたがタカミチが止めた。

「黒崎くんはここにいてくれ。すぐに戻るから。あと後で理事長室に行こうか」

タカミチは魅香にそれだけを告げると中に入ってしまった。

仕方なく魅香はネギ達を待っている間にこれまでの状況を整理することにした。

まず魅香が通う地域に麻帆良学園なんてものは存在しないし聞いたこともない。

第二に魔法使いと言う非現実的な者が存在していること。

確かに死神などもいるが魔法使いには出会ったことがないことからおかしいという点に付け加えた。

この二つの疑問から導き出される答えはいくつかあるが魅香はあえてその中の一つに絞った。

（もしかしてここは僕のいる世界からしたら異世界ってこと？）

魅香は自分の考えを否定していたがそれは現実を受け止めたくない
と言うことは自覚していた。

（なんでよりにもよって僕なのよ…。ほかにも人はいるじゃないか
…）

魅香は今ほど神を呪ったことはなかった。

そしてそんなことを考えているとネギとタカミチが職員室から出て
きた。

「どうしたんですか魅香さん？」

「えっ？ あ、いや、何でもないよ？」

魅香はいきなり話しかけられあやふやな言い方をしてしまっていた。

「じゃあ行きましょう」

「どこに行くの？」

「2－Aの教室だよ。ネギくんは今日からそのクラスの担任になる
からね」

タカミチにそう言われたとき魅香は自分の耳を疑ってしまった。

自分よりも幼そうなネギが教師になると言うことに驚いたのだ。

「えっとネギって何歳？」

「十歳ですよ？」

魅香はさらに自分の耳を疑ってしまった。

もはや幻聴を聞いているのではないかと思うほどだった。

「どうしたんですか魅香さん？」

「あはは…何でもないよ…」

脱力している魅香に不思議がりながらもネギとタカミチは2－Aの教室に向かった。

2－Aの教室に近づくにつれて何やら騒がし声が聞こえてきた。

「ねえタカミチ。理事長室はまだ行かないの？」

「ネギくんを連れて行ったら行こうか」

タカミチの言葉に頷き魅香たちは2－Aの教室の前で立ち止まった。

「黒崎くんはここにいてくれ」

「あ、分かりました」

魅香はそう言って教室の外の壁によってネギ達を待つことにした。

そこで魅香は教室の中とある人物を見つけた。

（この世界にも魂魄はいるみたいね）

魅香は半透明の少女を見ながら思う。

あとで浄化してあげようと思った魅香であった。

それから数時間分も経ち魅香はウトウトして眠ってしまっていた。

「黒崎くん、起きてください。理事長室に行くよ」

「んあ？タカミチ？おはよう」

魅香はのんきに伸びをしながらタカミチに言う。

タカミチはあきれた様子を見せながら言う。

「おはようじゃないよ。じゃあ行こうか」

「うん」

魅香は先を歩くタカミチに急いでついていった。

そしていくつかの門を曲がると理事長室に到着した。

「じゃあ入るよ？」

「うん、行こうか」

魅香とタカミチは理事長室の扉を一回ノックした後中に入っていた。

中には一人の老人が窓の外を見るように立っていた。

「高畑先生、その子は？」

老人は振り返りながらタカミチに問いかける。

「僕にも分かりません。だから彼女に直接話してもらうつもりです」

「うむ」

そう言うのとタカミチと老人―理事長の視線が魅香に突き刺さる。

魅香は困ってしまった。

自分は異世界人と素直に告げるかそれとも嘘をつくかと。

だが魅香はこの二人に嘘は通用しないと思い本当のことを話すことにした。

「僕は異世界から来ました」

...~ン

出会い（後書き）

感想待ってます!!

2-Aの生徒(前書き)

変なところがあったらソフトに指摘してください…

ではどうぞ！

2－Aの生徒

「異世界からやってきたとな？」

理事長は魅香の言葉に驚いた様子も見せずに聞き返した。

「まあ、絶対とは言い切れませんがね」

魅香もここが異世界とは完全に決めつけているわけではないのでそう答えるしかなかった。

とりあえず異世界と見ているだけなのだ。

「ふむ、仮にホントに異世界から来たとしてお主は何をしに来たんじゃ？」

「何をしにって聞かれても、僕は変な穴に吸い込まれてここに来たから別に来たくて来た訳じゃないんだ」

魅香は身を縮めながら理事長に言う。

「そうなのか。で、お主は何者じゃ？その服装に背中 of 巨大な刀かの？見るからに不審者じゃの」

理事長に言われて魅香は改めて自分の格好を見た。

死神にしては珍しい白い死覇装に身の丈ほどの巨大な斬魄刀と言う格好だった。

見るからに怪しいと言っているような格好だった。

しかも銃刀法違反に絶対に引っかかる斬魄刀まで持っているの下
手すれば犯罪者だ。

よくタカミチはこんな自分を学校に入れたなと魅香は思っていた。

「僕のいた世界では死神と呼ばれる人種ですよ？まあ確かに一般の
中にいたら不審者ですね」

魅香は理事長に言われたことに納得しながら言う。

するとタカミチが驚きながら言ってきた。

「死神ってとりつかれたら人を不幸にしたりするあれかね？」

「えっと、一般の考えだとそんな感じですが僕は違いますよ？魂の
管理などをするだけです」

「そうなのか。やはり僕たちの世界とは少し考え方が違うみたいだ
ね」

二人でうんうん、と うなずきあっていると理事長がコホン、とわ
ざとらしく咳払いをしてきた。

魅香とタカミチはすぐに理事長へと視線を戻して話を聞いた。

「とりあえず他の着替えはないのか？その格好では目立ちすぎるで
あろう？」

「そうですね。だけど僕着替え持っていないんですよ」

魅香が言うど理事長が仕方ないどばかりにどこかの部屋に行つた。すぐに戻つてきた理事長の手には何やら服があつた。

「仕方ないからこれを着なさい。これなら少しは目立たなくなるじやろ」

そういつて理事長は魅香に持っていた服を渡してくる。

「これ制服ですか？ かわいいですね」

「うむ、麻帆良学園中等部の制服じゃ。特別にお主に譲ろう」

「いいんですか！？ ありがとうございます」

魅香は頭を下げながら理事長にお礼を言つた。

とりあえず着替えを手に入れることが出来てほつとする魅香に理事長が言つてきた。

「ところでその刀はどうするんじゃ？」

理事長は魅香の斬魄刀を指差しながら言ってくる。

確かにこんなものを持っていれば嫌でも目立ってしまうだろう。

「うゝん……………どうしましょう」

考えた末になんにも思いつかなかったため聞き返す形になってしまった。

どうするかと聞かれてもこの世界に来たばかりでしかも知り合いと呼べる人は五本指に収まる程度しかいなかった。（ネギ、タカミチ、理事長、オコジョ）

「そうじゃの。なら寮を使うかの？」

「寮？空き部屋でもあるんですか？」

「いや出来るまでそこにももらうことになるの」

長い髭をさわりながら言う理事長に魅香は少々あきれていた。

自分は異世界から来た人間で自分てきにはそれを公にしたくないといいことを言っていないが普通はそう考えるはず。

なのに理事長は空き部屋のない寮に魅香を住まわせようとしている。

と言うことは必然的に誰かと相部屋になると言うことになる。

相部屋になれば斬魄刀などのことを聞かれちよつとしたことで自分が異世界から来たことがバレてしまう。

そうなれば色々めんどうなことになるのだ。

魅香的にはそれは避けたい事態だった。

「あの他にないんですか？それにこの学校の生徒でもないのに寮を

使ってたら怪しまれますよ。ね、タカミチってあれ？」

魅香がタカミチに話しかけようとしたときタカミチがいなくなっていた。

どうやら帰って行ってしまったらしい。

白状だなど思いながらも魅香は話を続ける。

「ふむ、確かにお主の言うとおりだの。ならお主がこの学校に入学すればよいのではないかの」

「いや、そんな簡単に入れるんですか？おかしくないですか、それ」

「うむ大丈夫じゃ。わしが何とかしよう」

そんなことでいいのかと思いながらも魅香はお礼を述べた。

すると理事長室の扉が開いた。

魅香が振り返るとそこには髪を伸ばした麻帆良学校中等部の制服を着た女の子がいた。

「失礼します、学園長先生。あれ？その子誰ですか？」

「二人ではないが普通に話してもよいぞ。そしてそのは転校生じゃ」

「ほんまに!？」

思いのほかその少女は転校生という言葉に食いついてきた。

どうやらこの世界でも転校生と言うのは特別な存在らしい。

「君、名前なんて言うん？うちは近衛木乃香や、よろしゅうな」

「えっと僕は黒崎魅香。よろしくこのかさん」

「このかでええよ？」

「あ、よろしくこのか」

「うん、よろしゅうな」

魅香とこのかは自己紹介を軽く済ませた後このかは理事長に言った。

「で、用って？」

「そうじゃった。実はこのかの部屋に今日来たネギ先生と黒崎くんを泊めてほしいんじゃよ」

理事長の言葉に魅香は驚いてしまった。

今あったばかりの木乃香の部屋に泊めてもらうのは少し気が引けたのだ。

だが木乃香はあっさりと

「ええよ？」

と承諾してくれたのだ。

これに感謝した魅香であった。

そしてとりあえず理事長室で着替えをして（木乃香が理事長の目を隠してくれた）理事長室を出た魅香と木乃香だった。

そして木乃香が聞いてほしくないことを質問してきた。

「なあ、さっきの服とデカいのはなんなん？」

「えっと…僕のいたところではああ言うのが流行ってるの。で、このデカいのは……ボードかな？」

魅香はかなり曖昧に答えてしまっていた。

さすがに刀ですとは言えないので嘘をついたがかなり苦しい嘘だった。

「ふーん、そうなんや？」

「う、うん」

結構あっさりと嘘を納得してくれた木乃香に罪悪感を覚えながら感謝した。

そして木乃香が向かった場所は職員室だった。

「なんでここに？」

「ネギくん探しに来たんやけど…おったおった!!」

木乃香の言うとおりで職員室のつくえのところに生徒名簿と睨めっこしているネギがいた。

どうやらクラスのみんなを覚えようとしているらしい。

なんとも真面目な人だなと魅香は思った。

「ネギくん」

木乃香がネギを呼びながら駆け寄っていった。

魅香も木乃香の後ろをついていきネギのところに行った。

「あっ、木乃香さん。ついでに魅香さん。どうしたんですか？」

「ついでって何よ。ついでって」

魅香はネギに顔を近づけながら言う。

するとネギは困ったような顔をしてきたのでとりあえず顔を離れた。

「あの、どうしたんですか？二人とも。僕に用事ですか？」

「あ、そうや。ネギくん空き部屋ができるまで、うちの部屋で暮らすんやて？」

「えっ！？木乃香さんの部屋ですか！？」

ネギがなにやら驚きながら言ってきた。

驚くのも無理はないであろう。

木乃香と相部屋と言うことは女の子だけの部屋に住むということだからである。

「ついでに僕も一緒だから。よろしく」

「よろしくお願いします。木乃香さん、魅香さん」

ネギは深々とこちらに頭を下げながら言ってきた。

なんとも真面目な教師であった。

「じゃあ行きます『グオオオオオオオオオオ』ッ!？」

魅香が行こうと言おうとした瞬間に凄まじい雄叫びが耳に入ってきた。

この雄叫びは魅香のいた世界にいるはずのものの声だった。

(どうしてホロウがこの世界に!?)

「な、なんやこの声!？」

どうやら木乃香にも聞こえていたらしく驚愕していた。

「声? そんなの聞こえた?」

魅香は平常心を装いながら木乃香に言った。

しかし内心はかなり焦っていたのだ。

そして魅香はネギにアイコンタクトをした。

（ネギ、このかを他の場所に移して）

（は、はい。わかりました）

言葉は交わしていないがネギは魅香の言いたいことが分かったようだった。

「このかさん。部屋に案内してください」

「え、でもさっきの声…」

「別に何も聞こえませんでしたよ？じゃあ行きましようこのかさん」

ネギは木乃香をほとんど無理やりこの場所から遠ざけた。

二人の姿が見えなくなるのを確認した魅香は瞬歩でその場から移動した。

（なんでこっちにホロウが…。まさかまたあの穴から！？）

魅香は瞬歩で高速移動をしながらそんなことを考えている。

そして人気のないような場所でホロウを発見した。

しかも、なにやら破面アランカルのようだった。

（ちっ、面倒ね。仕方ない気づかれる前に!!）

魅香は瞬歩で破面との距離を一気に縮めた。

そして斬魄刀を抜きはなつた。

「雪牙天衝!!」

魅香は斬魄刀を上から下に一気に振り下ろした。

すると斬魄刀の先から衝撃波が放たれた。

「ん？死神か。甘いわ!!」

破面は手から赤い光線を出して雪牙天衝を相殺した。

この赤い光線は虚閃^{セロ}と呼ばれるホロウにしか使えない技である。

二つの技はお互いに相殺しあい消滅した。

「なんでお前がここにいる」

「ふん、死神などに教えるものか!!」

破面は響転^{ソニード}で魅香に一気に近づいてきた。

響転^{ソニード}とは破面が使える瞬歩のようなものである。

そして破面は魅香に向かって拳を突き出してきた。

「くっ!?!」

魅香は斬魄刀の平で破面の拳を受け止める。

そしてそのまま破面を押し返して斬魄刀を振るった。

しかし破面には斬魄刀の切っ先がかすった程度だった。

「効かぬな。ではこちらも攻撃に移らせてもらおう!!」

破面はそう叫ぶと虚閃^{セロ}を連続で放ってくる。

対する魅香も雪牙天衝を連続で放ってそれを相殺していく。

そして魅香は破面の攻撃が止むと斬魄刀を今までよりも大きく振りかぶった。

「使うよ、父さん…」

魅香はそうつぶやくと斬魄刀を一気に振り下ろした。

「月牙天衝 オオオ!!」

魅香の斬魄刀からは今までのとは違い青色の衝撃波が放たれた。

しかも月牙天衝は雪牙天衝よりも威力が高いうだった。

さらに威力だけでなく速さも雪牙天衝を凌駕していた。

「なにっ!?!」

破面は魅香が放った月牙天衝に驚愕して動きが鈍っていた。

そして月牙天衝は破面に直撃した。

「やったの？」

魅香が半信半疑にそうつぶやいていると煙の中から破面の姿が見えた。

しかも体は血だらけの姿であった。

「死神め、よくもこの俺を。許さん!!！」

破面は腰の刀に手をかけながらそう叫ぶ。

「死神じゃない。黒崎魅香だ」

「そうかよ。俺はジャック・グルーラ。刺し碎け『デルトラ獄燐獣』!!!!！」

ジャックがそう叫ぶと体に変化していった。

これは刀剣解放と呼ばれる死神の斬魄刀の解放と同じ役割を果たすものである。

そして刀剣解放したジャックの姿はまるで闘牛士のような姿になっていた。

しかもかなり霊圧が跳ね上がっていた。

「ならこっちも!!！」

魅香は斬魄刀を前に突き出して斬魄刀を持っている手をもう片方で抑える。

そして叫んだ。

「卍・解！！！」

しかしやはり魅香の姿になんの変化もなく始解のままだった。

そんな状況に魅香は舌打ちをしているとジャックが突進してきた。

「ずいぶん余裕だな死神！！！」

いつの間にか近づいてきたジャックは魅香に言うど魅香を吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされた魅香は空中で体勢を立て直すが多そのまま下降していく。

そんな魅香に追い討ちをかけるべくジャックが突撃してくる。

「縛道の六一『六杖光牢』！！！」

魅香がジャックに人差し指を向けながらそう叫ぶ。

すると勢いよく突っ込んでくるジャックを六本の光の棒が捉えた。

「鉄裁さんに教わってて助かったわ。でもさすがに六十番台は詠唱破棄じゃ、今の僕じゃ長くは持たないか」

魅香は六杖光牢に捕らえられているジャックを見ながらつぶやく。

縛道とは死神が使う捕縛術や防御用の術式である。

縛道は詠唱を唱えて発動した方が力が強いが詠唱破棄をしても使えるのだ。

しかし詠唱破棄をすれば効力が下がるのが弱点である。

「くっ、貴様何をした!!」

「なんだ、縛道を知らないの？」

魅香は哀れみの視線をジャックに向けながらつぶやく。

するとジャックは怒声をあげながら魅香に言う。

「うるせえ!! 虚閃^{セロ}!!」

ジャックは魅香に向かって虚閃を放ってくる。

しかしもう魅香の勝利は揺るがなかった。

「月牙…天衝オオオ!!」

魅香は虚閃に向かって月牙天衝を放った。

しかし刀剣解放をしているジャックの虚閃と月牙天衝の威力は同じだった。

そのせいでどちらにも当たることもなく衝突し続けている。

だが魅香はさらに雪牙天衝を放った。

「これで終わりだ破面!!」

雪牙天衝と月牙天衝が混ざった攻撃はジャックの虚閃を打ち破った。

そしてジャックを貫いた。

「グアアアアア…」

ジャックはまるで空気に溶けていくように消えていった。

そして魅香はジャックを倒したことに一息ついていた。

そこで気がついてしまった。

今、自分の体が落ちていると言うことに。

「うわーっ!?!落ちてる!?!」

魅香はそう叫びながらなんとか地面に着地することが出来た。

しかし足が痺れてしまっていた。

「くう……。痛い……」

魅香は涙目にならながらそうつぶやいた。

そして足の痺れがとれようやく木乃香たちが待つ寮に向かっていった。

つづく…

2-Aの生徒（後書き）

思ったんですがアニメの『ネギま!?!』と『魔法先生ネギま!』って違う作品なんですか？

感想待ってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5307m/>

ネギま!?～死神の少女～

2010年10月8日15時34分発行